

[あとがき]

前方に「彫刻」 右方に「絵画」

今回の若林奮新作展は「前方に犬、下方に花」と題するインスタレーションの作品である。彫刻と絵画の各2点計4点で構成されている。カタログのテキストは若林奮について共感を持ち、多くの作品を観て、論考を重ねておられるお二人の評論家、市川正憲「若林奮——いのちに帰る——」、小泉晋弥「前方に犬、下方に花」をご寄稿いただいた。厚く御礼申し上げます。

今回の作品については、現時点(11月1日現在)においても制作中であり、カタログもその制作プロセスを示すものとなっている。このことをご理解のうえ、このカタログをお読みとりいただきたい。

私は若林奮さんの御嶽のアトリエを訪れ(10月26日)今回の展覧会の打合せをしたが、大変得るところが多かった。そこで、私なりに今回の展覧会について、書き記しておきたいのである。

画廊の入口を入ってすぐ右の壁面をA、Aに対峙する壁面をB、そしてAとBの中間の長い壁面をCとする。

①A面には銅板に描かれたドローイングがある。②B面には約50×50cm角の銅板に描かれたドローイングが縦に重ねられた集積2束とその2束の中間に鉄の椅子がある。これらによって彫刻が形成される。③C面には銅板に描かれたドローイングがあり、そしてその前面に約50×50cm角の紙に描かれたドローイングの集積の束と鉄の椅子がある。この部分が絵に与えられた場所である。

さて、このインスタレーションを制作した作家は、画廊の入口から入り、最初にどの位置に立つか？ 作者はA面の銅板ドローイングの前に進み、8メートル離れたB面に対峙する位置に立ち、彫刻的な空間を確認する。作者は彫刻は真正面から視るものであると言う。これはアルベルト・ジャコメッティの攻撃的な正面性の考え方と同じで、作者がジャコメッティに共感しているのがよく理解できるのである。

つぎに作者の視線は右手のC面の銅板ドローイングに向かう。もちろんその前にある紙の集積と椅子を含めて視ることになる。そして最初の視線は絵画を認識することとなる。

50×50cm角の銅板、紙に描かれた集積は、表面の一枚しか見ることがで

きない。集積の内部は何が描かれているか分らないのである。謎の多い想像力をかきたてる作品である。これらの作品は作者の毎日のしごとを象徴的に示している。毎日毎日、時間のある限りしごとをしている作家のしごとがみえてくる。これもジャコメッティに似ている。これは芸術家としては当然のことであると私は思う。われわれ観者に作家の見えないしごとの集積があることを暗示させる作品がここにある。

ところでなぜ作者は銅板に描くのか？ 紙でもなく、布でもなく、鉄板でもなく、どうして銅板なのか？ このことについて作者は言う。銅は私にはなじみ深い素材である。そして25年前、旧石器時代の洞窟でみた石灰岩の壁面に描かれたドローイングに感動したが、そこで石灰岩の壁面にかえて銅板を使おうという考が浮び上ったと言う。銅板にセンターポンチで点を打ち、塗料を塗る。紙や布また鉄板の感覚とは異なる抵抗感が作者にはピタリときたのであろうと私は思う。

そういえば、若林奮の最初のしごとは鉄の作品である。鉄は抵抗感の強い素材である。その鉄も茶色にさびた鉄ではない。ナマの鉄、グラインダーで磨いた鉄、そして黒く酸化した鉄である。私はこの鉄を使った作品が好きである。

ところが作者は鉄はやわらかいと言う。どうしてか？ 素材としての鉄のかたまりを造形するとき、その鉄を焼き、たたき、削り、研磨し、時間をかけて鉄と付き合っているうちに、かたい鉄はやわらかい存在になると言う。この言葉は実感から発した言葉である。今回のインスタレーションにも鉄の椅子が銅板の集積の間に展示されている。

最後に若林奮が造った庭園「緑の森の一角獣座」の問題である。日の出町ゴミ処分場の中にある2800名の共有するトラスト地のなかに造られた作品であるが、来年3月末には強制収用される危機にさらされている。

ゴミ問題は極めて困難な問題である。それぞれの立場からさまざま意見がある。人間は自然と共存して生きている。自然破壊は基本的に人間の生存にかかわることで、まして土地汚染により人間の生存に直接かかわる問題が起こるとすれば放っておけまい。この問題に抗議して作られた「庭園」は芸術作品であるから、それを撤去廃棄するということは芸術の死を意味する。

自然の死、人間の死、芸術の死は密接につながっている。進行はゆっくりと進み、直接関係、関心のない個々の人間にとっては、事態が深刻になって始めて気がつく。気がついた時は手遅れなのだ。もとは戻らないことを認識すべきである。

この庭園は、社会的な警告のモニュメント的な芸術作品である。いま生きているものは必ず死ぬ。それは生まれたものの定めである。しかし、死とともに新しい生命が生れなければならない。転生の連続で人間：人類は生きている。この連続が断ち切られることに危機感を覚えるのである。われわれは大きな岐路に立たされている。このように考えるとき、この「緑の森の一角獣座」は自然、人間、芸術の死の象徴としてだけでなく、同時に生：転生の象徴としてとらえるべきだと私は思う。死ぬことは生きることではない。

1999年11月1日

佐谷 画廊

佐谷 和彦